

松任谷正隆の

僕のひとりごと

17

VOL.17 鎌倉の家

話は僕が25-6歳くらいまで進んだと思うが、いったんまた15-6年ほど巻き戻そうと思う。

鎌倉の伯父の家のことを書き忘れてきたことに気がついたからだ。

鎌倉の伯父・・・僕が強く影響を受けた人の一人で、ちょっと・・・いやだいぶ変人だった。

180センチくらいの長身で、そのくせ体重は50キロ程度しかなかったのではないだろうか。

よく見ればダンディで、しかし口は悪く、しかもいつも怒鳴り口調だったから、

親戚一同みんな敬遠をしていたように思う。

戦争中に結核にかかり、片肺がなく、奥さんである伯母も同じ病で片肺がなく、

そのせいか二人には子供がいなかった。僕の母の兄にあたる伯父は、その父親である祖父の家業を継ぎ、

ゴルフ場の施工、経営などをしていた。つまり社長だ。

そうそう、僕の親戚で唯一クルマを持っていたのが伯父で・・・とはいっても

免許を持っていたのは伯母だけで、それだけでも子供心にどこか惹かれるものがあった。

口が悪いのはシャイなせいだ、ということが分かるようになると、僕はことあるごとに鎌倉に泊めてもらうことになる。

中学になって学校が日吉になると、通いやすい、という理由をつけてここに居候した。

ロケーションとしては材木座海岸からちょっと陸地に入ったあたりの住宅街。

建て替える前の家は良く覚えていないけれど、コッカースパニエルが3匹いた。

おばあさん、おかあさん、娘。

それぞれトンコ、カロン、アリン。

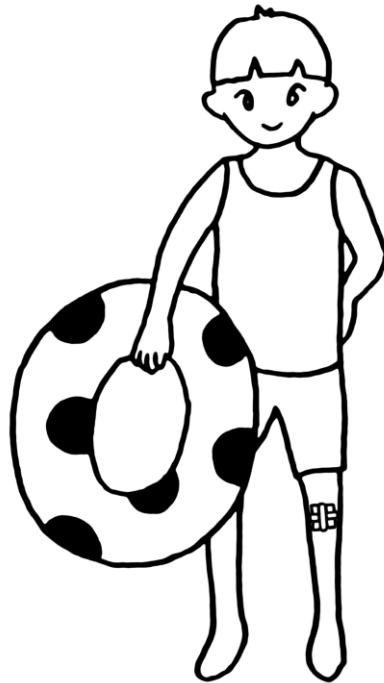
名前まで覚えているのはなぜなんだろう。



伯父の残した8ミリには、膝のあたりにおできを作つて絆創膏だらけの小学生の僕が、浮き袋か何かを持ちながら古い家から出てくる姿がある。これから海水浴ということだったのだろう。やがて建て替えて、1階がガレージ、その上がアンプ作りが趣味だった伯父の作業部屋になっているようなモダンな家になった。僕の泊まる部屋はその作業部屋の奥の和室。たぶん6畳程だったんじゃないかな。夫婦の寝室は中2階にあり、天井も低かったが、その天井が斜めになっていたせいか、やはりおしゃれな感じがした。

僕が泊まりに行くと、伯父は必ずと言っていいくらい「おい、坊主、何しに来やがった！」と笑いながら言った。僕はそう言われるのが好きで、何と答えていたかは覚えていないが、やっぱりここは居心地がいい、なんて思いながら荷物を広げていたような記憶がある。一方で伯母は親戚の中で唯一、僕に音楽家になれ、と言い続けた人で、それもきっと僕を居心地よくさせたんだろうと思う。

そうそう、1階はガレージの隣が居間とキッチン。奥の方にバスルームとトイレ。玄関の横には確か、小さな物置があった記憶がある。お風呂に開けっ放しで入る伯父の、普段のダンディさとはちょっと裏腹な樺姿が、なぜか今でも強烈に頭に残っている。



松任谷 正隆（まつとうや まさたか）

作編曲家、音楽プロデューサー。

4歳からクラシックピアノを習い始め、14歳の頃にバンド活動を始める。

20歳の頃プロのスタジオプレイヤー活動を開始し、

バンド“キャラメル・ママ”、“ティン・パン・アレイ”を経て、数多くのセッションに参加。

その後アレンジャー、プロデューサーとして多くのアーティストの作品に携わる。

鈴木茂、小原礼、林立夫とともにバンドSKYEを結成。

2021年10月、デビューアルバム「SKYE」をリリース。

日本自動車ジャーナリスト協会に所属し、「日本カー・オブ・ザ・イヤー」の選考委員も務める。

著書に「松任谷正隆の素」「おじさんはどう生きるか」などがある。

イラスト：W.Valy